
モンスターハンター～偽者の剣～

オヒテノー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モンスターハンター〜偽者の剣〜

【Nコード】

N6440Z

【作者名】

オヒテノー

【あらすじ】

初投稿です。投稿主は才能なんざ皆無な中で書いております。お許しを。あらすじはひょんなことからハンターになってしまったある男の子ががんばっているいろんなモンスターを狩っていく話です。ここ、おかしいんじゃない？といった所はドンドン教えてください。また、感想なんかもらえちゃうととても嬉しいです。批判でも嬉しいです。

プロローグ？（前書き）

よろしく願います！

ブローグ？

P M 5 時 3 5 分

凍土にて

（・・・はぁ・・・疲れた・・・寒い・・・）

凍えきつた凍土で大きめの重いリュックを背負っているとある旅の商人はゲンナリしながらそう思った。

商人の名前は『ミライ』。

彼は今からユクモ村に行く予定だった。

（でも次に行くユクモ村ってところは確か温泉が名物だって聞いたことがあるから、あつまってから次の村に行こうかな）

と、呑気な事を考えながら歩いていると横からモンスター怪物の鳴き声が聞こえた。

彼は右の方を向いて少し考えると、

（この鳴き声はきつと『バギィ』だな。アイツらの吐き出す液はとも眠くなるんだよな。さっさと逃げよう）

そう思つて前を向いたミライだったが目の前には例の『バギィ』がいた。

「チクシヨウ！！ もういやがるじゃねえかよー！」

ミライは驚きつつも、全力で『バギィ』から逃げ出した。

しかし彼の荷物はとても重く、はつきり言つて絶望的なスピードで走っている。

そんなミライに『バギィ』が負けるわけがなくすぐに追いつかれ全体重をのせた体当たりが彼の背中にヒットした。

「うおっ！」

幸い体当たりはミライ本人ではなく彼のリュックに当たった。しかし当然彼はバランスを崩してこけてしまった。

「ぐぼっ・・・おっ俺はおいしくなんかないぞー!!」

半ば投げやりになりながら起き上がり、後ろに後ずさるミライ。とその後ろから足音がした。

「・・・おい！その足音のやつ！それ以上こっちに来るな！」

しかし足音はどんどん大きくなっていく。

「なにやってんだよ！聞こえねえのか！早く戻れって！ここにはモンスターがいるんだよ！」

そしてその足音の張本人が姿をあらわした。
ハンター

そのハンターは素早い動きで彼の背中に装備されている双剣を取り出し今すぐにでもミライを食べんとする『バギィ』の首を簡単に切り裂いた。

「・・・なんだあんたハンターだったのか・・・たっ・・・助かった」

とてつもなくマヌケな声を発するミライにハンターは双剣をしまいながら、

「君！ケガはないね！」

そう聞かれてミライは、

「ありがとうございます。大丈夫です。」

と答えた。

ここでミライがハンターに対して敬語だったのは、べつにミライの頭がおいしい訳ではなく、単にハンターという職業がみんなの憧れであり、ヒーローのようなものだからだ。

この世界ではハンターがいるだけでほとんどの事が解決してしまう、そんな世界よのなかなのだ。

そして今回もそのハンターに解決してもらったというだけのはなしだ。

しかしまだミライは知らない、これからおこる惨劇に。

プロローグ？（後書き）

全体的にグダグダです。

多分これからつじつまが合わなくなることもあるでしょう。

そっとしておいてあげてください。

自己満足なんです。

プロローグ？（前書き）

2話目も連続で投稿します。

ブローグ？

pm 4時23分

凍土（ユクモ村付近）にて

偶然助けてもらったハンターと話していくとミライとハンターとの間には共通点があった。

それはこれからの行き先だ。

ミライはこれからユクモ村へ行くのだが、奇遇なことにハンターの方もこれからユクモ村へ行くそうだ。

そういったことから2人は一緒にユクモ村へ行くことになった。

歩きながら聞くハンターの話はとても素晴らしかった。

狩猟先で砥石を忘れて必死で狩猟エリアを駆けずり回つという話には爆笑だったし。仲間が死んでしまったという話をきいたときにはすごく悲しい気持ちになった。

そしてミライもハンターに旅をしている時の感動的な話をしていると不意にハンターが立ち止まり、とても悲しそうな顔で笑っていた。どうしたのだろう。

と、思っていたがそんな顔もすぐに消え、もとの笑顔に戻った。

なんかマズイ事言っちゃったかな？と思っていたミライだったが、そんなことはすぐに忘れまた話だした。

そしてしゃべり疲れた2人がとても寒かったのでホットドリンクを飲んでみると、ついにソレは現れた。

ソレはふざけたようなバカデカイ声を発しながら2人に近づいてきた。

『^{イビルジョー}恐暴竜』、それは出会ってしまったたら即撤退が鉄則のモンスター。
そんなモンスターが現れてしまったのだ。

「なっ・・・なんなんだ。このモンスターは・・・」

ついミライがつぶやいている中、ハンターは諦めたようなため息を吐いた後おもむろに彼の背中にある双剣を引きぬいて、

「早くその重い荷物を捨てて逃げろ！！その荷物とお前の命どっちが大切だ！！」

と急に大きな声を出した。

急に言われてビックリしたミライは、言われるがままリュックを降ろした。

・・・ここでミライは一つ気がついた。

きつとこのハンターはこの『^{バケモン}イビルジョー』に勝つことができない。
しかし自分を逃すためにあえて勝てない相手と戦おうとしているのではないかと。

しかし、ハンターは何でもないように。

「大丈夫！なんとかなるさ！」

と、言っているが『イビルジョー』はヨダレをダラダラ垂らしつつ今にも襲いかかりそうだ。

「絶対に追いつく！だから早く行け！」

そっぴいながら片っぱの剣を『イビルジョー』に投げた。その剣は見事にイビルジョーの片目に当たった。ハンターってスゲー。

『イビルジョー』の雄たけびが凍土にこだまする。

「絶対に追いついて来いよ!!」

そう言いながら全力で逃げ出すミライ。

ハンターの姿が見えなくなる。

ハンターのものであろう絶叫が響き渡る。

・・・どれだけ走ったのだろうか。

もう足の感覚がなくなっていた。

小高い山の頂上でミライは足を止めた。

意識がもうろうとしている。

「やつ・・・・・・・・やべー・・・・・・・・」

ホットドリンクを飲んでいるので凍え死ぬことは無いだろうが、モンスターに襲われそうで怖い。

村までもう少しだ・・・そう思ったとき不意に足がもつれた。

やばい。ここでこけてしまったらマジで死ぬ。

しかしミライはそのままこけて山を転がるように落ちてしまった。

ミライの視界が狭くなっていく。

そしてついにミライの意識が断絶した。

「良かった！目を覚ましたんですね！」

そんなこうるさい声が聞こえる・・・

すごい暖かい。そうかここは天国なんだなーとミライが超適当な事を思っていると、

「すみません！早速で悪いんですけど、クエストがたまっているです！」

・・・は？どういう事？

「ちよつ、・・・え？」

ミライが混乱していると、

「さあ、ハンターさん、がんばっていきましょうー！」

ここは天国ではなくユクモ村である。

そしてミライはハンターになってしまっていた。

ブログ？（後書き）

どうでしたか？
感想待ってます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6440z/>

モンスターハンター～偽者の剣～

2011年12月21日19時51分発行